病院ニュース NEWS

2010年10月　第23号（年4回発行）

主な内容

1面 ●病院ボランティアの皆さん、どうもありがとう！―ボランティア感謝状贈呈式―
●千葉駅⇔千葉大学病院のバス増便！

2面 ●患者さんの全経過を地域連携で一貫フォロー
―千葉県地域連携の会「平成22年度会合」―
●患者さんの声

3面 ●さらに高精度の治療が可能に―放射線部でリニアックを更新―
●<ミニニュース>サマーインターンシップ／中学生の看護体験／インドネシア大学一行が来院

4面 ●<フリートーク>血液内科診療教授　中世古(なかせこ) 知昭
●<亥鼻むかし・昔>⑭ 千葉氏の本拠地・千葉城
●<トピックス>脳卒中対策

千葉大学医学部附属病院　〒260-8677 千葉県千葉市中央区亥鼻 1-8-1　TEL 043-222-7171（代表）　http://www.ho.chiba-u.ac.jp/

病院ボランティア活動員のみなさん

病院ボランティアの皆さん、どうもありがとう！

ボランティア感謝状贈呈式

外来患者さんの受診時のお世話をしたり、闘病中の子供たちの遊び相手になったりして活躍中の〈病院ボランティア〉に対する「感謝状贈呈式」が行われました。河野病院長からの感謝状贈呈に引き続き、意見交換会を通じてボランティア活動員の皆さんからのご意見やご要望を、生の声として聞くことができました。

この式は、病院から日ごろのボランティア活動に感謝の気持ちを伝えるために毎年開催しているもので、今年は9月29日、約30名のボランティア活動員が参加し、12名の個人と3つの団体に感謝状が贈呈されました。引き続き、「ボランティア活動の紹介」、「ボランティア活動員と病院職員による意見交換会」、「総合診療部・生坂教授による講演」、そして「ひがし棟10階展望ラウンジ・ヴァンセーヌでの懇親会」と、3時間半にわたるプログラムを通じて活発な意見交換と交流が行われました。

当時の医療福祉部(現、地域医療連携部の前身)がボランティア活動の受入れ窓口となったのが平成11年。その後、延べ約340名の方が登録され、現在約80名が日々千葉大病院で活動されています。その内容は実に多種多様で、外来・病棟での患者さんのお世話、院内での図書の貸し出し(なのはな文庫)、小児病棟での絵本の読み聞かせや遊びのお手伝い、さつき保育園での紙芝居、入院患者さんへの朗読ボランティア、外来ホールでの演奏、ギャラリーへの作品展示、メイクアップボランティアなどがあり、幅広く患者さん、そして病院に貢献いただいています。

代表者のあいさつ

病院職員が気づきにくい点、行き届かない点、また対応が難しい点に目を向け、日々活動いただいているボランティア活動員の皆さんには心より感謝申し上げます。少しでもボランティア活動を快適に、そして活発に活動いただけるよう、私たち職員も努めていきたいと思います。

病院長(左)からの感謝状贈呈

ボランティア活動員募集中!

●お問合せ先
千葉大学医学部附属病院
地域医療連携部
●電話
043-222-7171
内線6487～6491
●受付時間
月～金　9：30～16：00

いっそう便利になりました!!

●千葉駅 ⇕ 千葉大学病院のバス増便！

京成バスのダイヤ改正に伴い、10月1日(金)より、千葉駅と千葉大病院を結ぶ路線バスが増便されました。

これまで最も混雑していた平日の朝7時台、8時台の運行本数がそれぞれ6本から10本、8本から11本になるほか、10時台から12時台の運行本数も6本から8本に増便され、利便性の向上と混雑緩和が見込まれます。

詳しい時刻につきましては、新しい時刻表を外来ホール棟1階に掲示しております。また、バス停名も『大学病院』から『千葉大学病院』に変更となりました。

外来駐車場は大変混雑しております。ご来院の際は公共交通機関をご利用いただきますよう、ご協力をお願いいたします。

いのはな コラム

「万が一のことも考えて」

エコカー補助金もついに終わってしまいましたね。実は私も、車検の時期と重なっていたこともあり、時流に乗って買い替えを行った一人です。今度の車は、少し大きめなツーリング7シーター。燃費もよくなり、たっぷりの荷物も積み込めるし、冬の道も安心な4輪駆動。夏のキャンプに冬のスキー、身体を動かすことが大好きな私にとって、次の休みの計画が楽しみです。

今の車は、燃費のほかにも安全性能が10年前の車から格段に上がっているとか。私も家族が増えたこともあり、安全性能で高評価な車を選びました。

安全は、自分自身のためでもあるし、他の人のためでもあります。私の身内の一人は某自動車メーカーで設計を行っており、少し前まで「対人衝突安全」の設計のため"たった1mm"の寸法のことで、日々遅くまで頭を悩ませていました。万が一の際の相手側にとっての安全。車を運転する側である私たちが、普段は気付かない部分のことも日々真剣に考えてくれているのだと、改めて気付きました。

「万が一のことも常に考えて」。これは私たちも同じです。私は生命維持管理装置の運転・保守を担う臨床工学技士として、医療機器の安全管理を通して患者さん、そして医療者の安心を支えていければと考えています。

（ME機器管理センター臨床工学技士　古川　豊）

患者さんの全経過を地域連携で一貫フォロー

●千葉県地域連携の会「平成22年度会合」

〈地域連携〉の重要性を再認識した全体会

病気の発症段階から治療、回復後のケアまで、患者さんを病院、行政、福祉機関が一体的にフォローする組織として発足した「千葉県地域連携の会」――。その4回目の会合が7月28日千葉大病院で開かれました。会場には、県内の医療機関、市町村の担当者をはじめ消防、訪問看護、薬剤師団体などから321名が参加、「千葉県の医療の現状」「地域連携のあり方」について、活発な意見、提案が論議されました。

「救急医療」「病診連携」など分科会で討議

救急医療分科会の様子

講堂で開かれた「全体会」では、まず河野陽一院長が「地域連携の会」の意義を説明。組織とシステム強化に向けた関係機関の理解と協力を呼びかけました。次いで、県医師会の土橋副会長、県健康福祉部の井上理事などがそれぞれの立場から〈地域連携〉の重要性とその取り組み内容を説明。千葉大病院からは、高林病院長補佐が「千葉大学が果たすべき役割」、食道胃腸外科の松原教授が「がんの連携パス」について報告しました。（パス=path=は道筋の意味）

その後、講堂と会議室を使って「脳卒中パス」「開業医のためのパス―糖尿病・心筋梗塞」「病診連携」「救急医療」「がんパス連絡会―胃・大腸・肝・肺・乳・子宮」と5つの分科会が開かれ、それぞれ熱心な情報、意見交換がくり広げられました。

1年に複数回開催を望む声も…

会場では、講堂前に「千葉県救急医療の状況と将来予測」「共用型地域連携パス」などのポスターが展示されたほか、シミュレーションセンターの見学も行われ、最後に院内のレストラン「ヴァンセーヌ」で開かれた懇親会で幕を閉じました。

「地域連携の会」は4年前に発足、年に1回ずつの開催で、今年で4回目の会合を迎え、参加団体も年々増えてきています。また今回は、多くの参加者が自由に自分の意見を述べたり、質問できる会合としたこともあってか「地域連携の大切さがよく理解できた。1年に1回といわず複数回開催して、組織を一層充実強化すべき」との声も寄せられました。

開業医のためのパス分科会の様子

患者さんの声

皆様の声にお答えします

冷房が強く、頭痛が…

Q **病院の冷房が強く、待ち時間の間に指が冷たくなったり、頭痛がしたりする。温度の設定をあげられないか。**

A ご不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした。外来ホール棟および外来診療棟待合い箇所は、その日の天候および外来患者人数により空調温度を微調整しており、多くの方が快適に感じられるよう今後とも、きめ細やかな空調温度の設定、維持に努めてまいります。

老眼鏡を置いてほしい

Q **外来ホールに、老眼鏡を備え付けてほしい。**

A 老眼鏡は盗難防止のため，外来ホール棟1階の総合案内横に配置していますが、おそらく分かりづらかったのだと思われます。ご不自由をおかけし申し訳ありませんでした。ご指摘を受け、老眼鏡を初診受付窓口(1番窓口)前の記載台に配置することといたしました。

マスクなしの患者の存在

Q **マスクを着用せず咳をしている患者への注意書きが見られない。特に抗がん剤治療を受けている患者にとって、咳は命にかかわる問題ともなるので、積極的にアピールしてほしい。**

A マスク着用・咳をしている方への注意については、患者さん、御面会の方々へのお願いとして、ラウンジや病棟カウンターに掲示しており、必要に応じご協力をお願いしております。感染防止のためのマスク着用については、患者さん、御面会の方々にもご理解、ご協力をいただけるよう、今後も努力してまいります。

面会時間外に見舞い客の話し声

Q **面会時間ではない時間に、病室で話し声がしてうるさかった。時間は守ってほしい。**

A 日頃から、面会は面会時間内にお願いしておりますが、今回は行き届かずご不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした。今後よりいっそう面会時間の遵守のお願いを徹底し、入院患者さんの療養環境向上に努めてまいりたいと思います。

さらに高精度の治療が可能に

●放射線部でリニアックを更新

この度、千葉大病院に最新の放射線治療装置（リニアック）が増設され、まもなく治療が開始できることとなりました。

この装置の最大の特徴は、「画像誘導放射線治療」と呼ばれる今までよりさらに精度の高い放射線治療が可能なことです。リニアックに搭載されたCTを用い、体や臓器の動きによるがん病巣の位置の変化に即座に対応して、治療寝台上で照射部位を自動的に修正します。照射すべきところの形状を決める多分割絞りのスペックも向上し、病巣の形により一致した照射野が作れるようになりました。

この装置を用いて来年度には「強度変調放射線治療」が開始できるよう準備しています。治療開始とともに現在の治療装置も最新のものに更新し、〈Rapid Arc〉と呼ばれる回転方法による強度変調放射線治療や、呼吸に同期した放射線治療を開始する予定です。

治療設備の増設や更新に伴い、患者さんの待合室を新設しました。洗面所、更衣室、簡易ベッド、生体モニタ、大型３ＤＴＶなどを用意し、治療を待つさまざまな患者さんに対応できるようになっています。

また新しいリニアック室の入り口には、プロの写真家などの厚意により集められた大型の写真が左右に並び、ブラックライトで浮き上がります。

新しい放射線治療装置（リニアック）

リニアック室の入口

mini news

全国から88名が参加、看護を体験

●サマーインターンシップ

来春卒業予定の看護学生を対象とした「サマーインターンシップ」を８月17日から4日間、８月24日から４日間の計２回、８日間にわたり開催しました。

希望する部署での看護実践や夜勤体験、専門・認定看護師の活動見学などが主なプログラムで、全国から学生88名が参加しました。

例年にない猛暑の中、参加した学生さんからは「自分の働く姿がイメージできてよかった」「チームの連携、雰囲気が素晴らしく、自分もその一員になりたいと思った」といった感想が寄せられました。

来年も魅力あるサマーインターンシップを企画し、多くの学生さんが、千葉大病院に就職してくれるようにしていきます。

なお「サマーインターンシップ」は、今年で５回目。参加した学生さんの多くが本院に就職しています。

＊病院ホームページにも掲載中です。

看護実践の様子

「先進医療の現場を視察」

●インドネシア大学一行が来院

日本の大学病院における先進事例を調査するため、このほどインドネシア共和国からの視察団が千葉大病院を訪れました。

一行は、インドネシア大学第二副学長をはじめとする総勢11名で、まず医学部会議室で医学部、看護学部、病院関係者から医学教育カリキュラム、チーム医療実践、院内ＩＴシステム、地域連携などについて説明を受けた後病院内へ。

内視鏡シミュレーターの説明を受ける一行

そこでは、特別病室などを視察した後、次いで研修医や新人看護職員などが模擬機器を活用して実践的なトレーニングを積むシミュレーションセンターを訪問。実際に内視鏡シミュレーターを使ったトレーニングを体験したり、その他の医療機器を実際に操作するなど興味津々の表情でした。

インドネシアでは、現在医学関係学部や大学病院の整備を計画しており、日本国内の複数の大学病院を訪問して、その先進事例を肌で学ぼう――というのが今回の視察の目的で、「インドネシアの医療サービス向上の一助になれば」と実現したものです。

「患者さんとお話できて嬉しかった！」

●中学生の看護体験

ここ数年全国の中学校では、総合的な学習の一環として、職場体験を行う学校が増えているようです。それに伴い最近では、医療関係の職業に興味を持つ中学生が、病院での職場体験を希望する件数が増えました。本院看護部でも、看護師の体験を希望する中学生を受け入れており、昨年度には５校を受け入れ、今年も既に3校の受け入れが決まっています。

２～３日間のプログラムでは、車椅子操作等の看護技術の研修を行ったうえで、看護師と一緒に患者さんに食事を配る、ベッドメイキングを行う、検査に行く患者さんに付き添う等の体験をし、これまで「人の命を助ける、人の役に立つ仕事の大切さを感じた」「患者さんとお話できて嬉しかった」などの感想をいただいています。

また、看護の体験だけでなく薬剤部、臨床栄養部、放射線部、事務部などの見学を通じて、病院で働くさまざまな職種に興味を持ってくれています。

今後も将来医療職を目指す子供達のために、病院や病院で働く職種を理解していただける機会として、看護体験の受入れを行っていく予定です。

FREE 〈フリートーク〉 TALK

夢は白血病・リンパ腫を薬で治すこと

千葉大学医学部附属病院
血液内科診療教授
中世古（なかせこ） 知昭

〔プロフィール〕
●昭和37年11月、静岡県富士市に生まれる。サッカーで有名な静岡県立清水東高校卒業後、千葉大医学部卒業。現在千葉市中央区に住み、妻と長男(中2)、長女(小6)の4人家族。
信条は、患者さんとそのご家族、学生諸君に対しても、常に分かりやすいことばで話すこと。スポーツ観戦(特にサッカー)が大好きで、現在「iPad」にハマっている。

骨髄移植など国内有数の治療実績

血液内科は、血液やリンパ腺にかかわる病気を対象とし、病名でいうと悪性リンパ腫、白血病といった血液のがんから、鉄欠乏症貧血、血小板減少性紫斑病まで、幅広い疾病に対する診療を行っています。現在、千葉大病院で行っている血液に関する主な病気とその治療は次のとおりです。

●急性白血病に対する化学療法＝急性白血病の治療では、日本成人白血病研究グループ（JALSG）に参加し、最先端の化学療法を行っています。

●造血幹細胞移植療法＝造血幹細胞移植療法は、多岐にわたっていますが、患者さんに合わせて同種骨髄移植、同種末梢血幹細胞移植、臍帯（さいたいけつ）血移植、同種ミニ移植、自家末梢血幹細胞移植などの治療法を選択しています。

●悪性リンパ腫＝リツキシマブ併用化学療法、放射線療法のほか、必要により自家末梢血幹細胞移植を行っています。

●慢性骨髄性白血病＝主にグリベック内服による外来通院治療を行っています。

●多発性骨髄腫＝サリドマイドやベルケイドなど最近新しく登場した治療薬を用い、さらに自家末梢血幹細胞移植や同種ミニ移植も行っています。

これらのうち、特に1986年から開始した骨髄移植、末梢血幹細胞移植、臍帯血移植では、2010年3月現在、400人あまりの方に移植を行っており、国内でも有数の治療実績を誇っています。また、日本骨髄バンク、臍帯血バンクネットワークの認定施設になっていて、国際骨髄移植認定施設でもあり、北米骨髄バンクとも提携、海外から提供された骨髄の移植も行っています。

めざましい進歩を続ける治療技術

白血病やリンパ腫は、20年ほど前まではきわめて死亡率が高い病気だったのですが、最近次々と画期的な新薬や治療法が登場しました。その結果予後は大きく改善し、化学療法で治るがんの代表的な病気となってきました。またわが国が超高齢化社会を迎えたことで、近年患者数は増加傾向をたどっています。今後多くの医学部学生のみなさんが〈血液の病気〉と進歩の著しい血液内科の診療・研究に関心を持ち、とても魅力的なこの分野に入っていただきたいと願っています。

血液内科への思い

私が〈医師〉になろう――と思ったのは、小学生のとき、手塚治虫のマンガ『ブラックジャック』を愛読し、病気に立ち向かう医師の姿に憧れたことがきっかけでした。

また〈血液内科〉を選んだのは、千葉大医学部5年生のとき、実習で急性リンパ性白血病の同年代の青年を受け持ったのが発端。たまたま前の年に千葉大病院で初めて骨髄移植が行われており、「なんとかこの青年を助けたい」と願ったものの、ついに亡くなってしまった――という痛切な経験から、「この道を究めたい」と決心したのです。

血液の病気に対する治療法は、めざましい進歩を続けていますが、まだまだ合併症や副作用などの問題が残っています。それだけにやりがいのある分野でもあり、私の最大の夢は〈骨髄移植をせず、副作用の少ない薬で治す方法を見つけること〉です。

トピックス

早期予防・早期発見と早期治療を

●脳卒中対策

脳卒中は、生命のみならず、動く・話す・考えるといった人間の基本的な機能を突然奪う重大な病気です。発症を予防することが何より大切ですが、幸い脳卒中は、生活習慣の改善により発症率の抑制が可能です。血圧・食事・運動・ストレスなど多因子が発症に関っており、最近では睡眠時無呼吸症候群、メタボリックシンドローム、慢性腎臓病との関連も重要視されてきました。

壮年期以降の方は、一度は脳ドックを受けることをお勧めします。無症候性病変の早期発見により、適切な予防処置を取ることが可能です。一過性の軽症発作を放置しないことも重要なので、迷わず専門医に相談してください。

治療面では、血管内治療の発達により、手術をしない治療が可能となりました。器具や技術の進歩も著しく、例えば発症3時間以内の制限のあった超急性期脳梗塞の再開通治療も、8時間まで可能な時代が訪れようとしています。

ショウペンハウエルの“時はよく用いるものには親切である”という言葉が、特に重要な分野です。

（脳神経外科　小林英一）

あとがき

信じられないほど暑かった今年の夏もようやく終わり、秋も深まってまいりました。

「秋」といえば、スポーツ、行楽、秋の味覚など、楽しめることが盛りだくさんですが、今回は「芸術」を取り上げてみたいと思います。

この季節になると、コンサートや美術展などを楽しみたい気分になりますが、私が所属しているアマチュアの吹奏楽団も、ミニコンサートの依頼や文化祭などへの出演で忙しくなってきました。千葉大病院では、演奏ボランティアによる外来ホールでのピアノ演奏が定番です。開催日は不定期ですが、週1回程度で皆様に演奏を披露させていただいておりますので、ご来院の際にはお楽しみいただけたら幸いです。

（外来B1F 通院治療室　がん看護専門看護師　奥　朋子）

亥鼻 むかし・昔 14

千葉氏の本拠地・千葉城

千葉市で最も有名で象徴的な建造物といえば、中央区亥鼻にある通称「千葉城」でしょう。天守閣を模したコンクリート造りの千葉市立郷土博物館があり、館内には千葉市や千葉氏の歴史に関する展示がされています。

現在、千葉氏の居館跡として考えられる所は他にもありますが、古くから亥鼻山付近にあったであろうと伝えられています。この城は、源頼朝の挙兵に際しいち早く参陣し、鎌倉幕府の創設に力を尽くした千葉介常胤の父・常重が、大椎城から拠点を移した1126年(大治元年)以来、145年(康正元年)に胤直が支族の原胤房に追討されるまで、19代330年にわたって上総・下総を支配した千葉氏の拠点でした。

猪の鼻の形に似た台地を利用、北に流れる都川を天然の水堀とし、西は急な崖、南は入り組んだ谷津を空堀とした要害でした。現在は土塁のみが残り、千葉氏の歴史を静かに語っています。

（歴史民俗研究家・宮原さつき）